

tact_web_interview

武井宗道さん

武家茶道の宗家に内弟子入門。2013年、御家元より「宗道」の号を頂く。同年、流派から離れる。それより、流派に依らない茶の湯を伝える。

現在は清澄白河(東京)の清州寮にて座学稽古や茶会を毎月開催。

東京の他に、京都、金澤にも毎月訪れている。

また、企業や研究機関を対象に、座学を中心とした茶の湯研修も行っており、ソニーコンピュータサイエンス研究所(CSL京都)では、茶の湯学(全10回)講師も勤めている。

取材日時 2024年9月11日

変化を生む「型」とその転換点

茶道の歴史を辿ると、転換点となる時代ごとに「新しい型」が生み出されてきたことがわかります。薬として日本に入ってきた抹茶が、やがて闘茶のルールを通じて遊芸化され、東山文化の中でわび茶が誕生し、さらに格式を求める武士によって武家茶道が確立されていきました。これらはすべて、その時代に生きた異色の人々が新しい「型」を創り出し、その型を同時代のプレイヤーや後代の人々が補強し、形作っていった結果です。

「型」とは単に継承されるものではなく、次世代の「型破り」を生むための土台です。茶の湯における「守破離」の考え方も、この連続性を示しています。「守」で型を徹底的に学び、「破」でその型を壊し、最終的に型すら意識せずに自然体となる「離」に至る。これは単なる個人の成長の道筋ではなく、文化や思想が転換点を迎える際のダイナミズムそのものです。

千利休の弟子、山上宗二が残した『山上宗二記』には「まずは師匠を絶対とせよ、そしてその後は真逆を行け」とあります。この教えは型の存在意義を端的に示しています。型がなければ型破りは生まれず、型無しとなります。ただの無秩序が残るだけです。型が堅牢であるほど、破られる際に鮮烈なコントラストが生まれ、新たな創造が可能になるのです。

「道」としての茶と、自分を掘り起こすプロセス

私が名乗る「宗道」という号は、お家元からいただいたものです。「道」とは、振り返った後ろに並ぶ首のイメージから来ていると言います。首刈りという漢字の由来はおぞましくもありますが、それは自分が進んできた道を振り返った時、そこに連なってきた経験や痕跡を認識することを意味しているのかもしれません。

自分が何者であるかを見つめることは簡単ではありません。忘れてしまった記憶や、無意識に存在している自分自身が、今の自分を成り立たせているからです。その存在を掘り起こすには、身体を動かし、考え、繰り返すことで、自分の中に眠る「道」を形にしていくしかありません。お点前の稽古もそうですし、日々の試行錯誤も同じです。何度も何度も繰り返す中で初めて、振り返った時にそこに自分の道が見えてくる。

「道」とは他人が敷いてくれるものではなく、自分で見つけ、掘り起こし、踏み固めていくものです。そのためには回数をこなし、実践を重ねるしかないのです。

武家茶道の遺産と現代の「破」への挑戦

武家茶道は、400年前に当時の武士たちが武家文化の中で確立したもので、わび茶の精神を引き継ぎつつ、朝廷文化の雅やかさや、国際的な交流の要素を取り入れています。利休の流れを汲みながらも、時代に応じてパブリックな側面を強調し、武士たちが他国の人々や異文化と接する際の場として機能してきました。

私はこの流儀の「守」の部分を守りつつも、自分の背景や時代性を反映させた「破」を試みています。東京の下町文化や現代アート、映画、あるいは食文化への関心といった自分の要素を茶道の中に組み込み、新しい型を模索しているのです。

ただし、歴史を遡れば遡るほど、茶道の世界はすでに「考え尽くされた世界」であることを痛感します。400年の歴史の中で、ほとんどの創意工夫はすでに試みられています。だからこそ、焦ることなく、自分の茶会を通じて他者と交流する中で、自然と新しい「型」が生まれるのを待つしかありません。それが新しい歴史を刻む一歩になるのだと信じています。

茶道の本質—公共性と他力本願

明治以降、茶道は新興財閥に広まりましたが、彼らは高額な道具や茶室を独占的に楽しむプライベートな空間として茶道を消費しました。この時代の茶道は、型を創るという文化的な貢献をすることなく、単に要素を高価にしていくだけに終始しました。利休の時代のように、「誰にでもできる型」を生み出す革命性を欠いていたのです。

茶道の本質とは、自己満足のためのプライベートな遊びではなく、公共性を帯びた「他力本願な儀式」であると私は考えています。茶会を構成する空間や道具は亭主が用意するのですが、それを動かし、意味づけするのはお客様です。茶会は他者の存在によって初めて完成するものです。この他者への依存性こそが、茶道を文化として成立させている要素だと言えるでしょう。

また、茶道の歴史には、命がけの緊張感も存在しました。武士が茶会で道具の意図を読み解き、毒殺の危険を察知する。文化は常に生命と死の両方を扱うものです。現代の日本では、命のリスクがなくなり、文化が腑抜けたものになりつつありますが、本来文化とはその根底に生と死を含んだダイナミズムを持つものなのです。

内部装置と外部装置—茶道を通じた自己と他者の共鳴

茶道の空間を構成する上で、私は「内部装置」と「外部装置」という概念を意識しています。内部装置とは、自分の好みや内面性を反映したもの、外部装置は道具や服装といった外的な要素です。この二つを巧みに組み合わせることで、他者を受け入れる空間を創り出すことができます。しかし、茶会はあくまで亭主の発表会ではなく、他者との共鳴によって完成する動的なものです。

茶道は、他者によって自分が成り立っていることを教えてくれる儀式でもあります。それは、ただ美しいお茶を点てる技術や華やかな道具を誇示するものではなく、他者の存在と共に自分の見つけ直す場なのです。この他力本願な精神が、現代の私たちにとっても重要な学びを与えてくれるのではないかでしょうか。

未来の「型」を創るために

誰もができる「型」を創り、それが新しい文化の転換点を作る。それこそが茶道が教えてくれる創造の本質です。茶道の歴史とその中にある他力本願の精神は、単なる伝統文化ではなく、現代社会における自己と他者、個人と公共を結びつける新しい可能性を示しています。

命のリスクが薄れた現代だからこそ、茶道が持つ人間関係のリテラシーや他者との共鳴の重要性は再評価されるべきです。そして新しい「型」は、誰にでも真似できるものでなければならない。それが文化の公共性を生み出し、次世代の「型破り」を生む土壤となるのです。

(聴き手:酒井一途)